



ヤリチン勇者からハーレムを
寝取りついでに

TSMメス堕ちさせる話



エロバトルン文庫



登場人物

勇者 アスカ

巨乳ヒロインたちと旅をする
極悪非道のヤリチン勇者。
しかし、プライドとちんぽを
奪われTS爆乳美少女に。



主人公 ハヤテ

努力して盗賊のスキルをみがいてきた主人公。
勇者や取り巻き達に奴隷として虐げられてきた。
しかしスキル「略奪」ですべてを奪う復讐を始める。

登場ヒロイン



魔法使い エリナ

サディストな巨乳魔法使い。
無尽蔵の魔力を持つ。
マイカの妹。
三人の中で一番感度がいい。

僧侶 マイカ

腹黒い巨乳僧侶。
回復魔法などの知識量が
すごい。エリナの姉。
三人の中で一番の巨乳。



戦士 アリサ

すぐ暴力をふるう巨乳戦士。
圧倒的な力を持つ。
単純で流されやすい。
三人の中で一番純情。

1、ヤリチン勇者と取り巻きハーレムのトリプルパイズリ

「やめろ！ やめてくれ！ ……ひい！ お願いですそれだけは！ 勇者のボクにちんぽ挿れないでえ！！！」

魔王から世界を救うはずだったヤリチン勇者は、奴隷として支配していた俺、ハヤテ＝プランダーに自慢のデカちんぽを奪われ美少女に変わってしまった。

「ああ！ 勇者様♥あんなにかわいく、爆乳になっちまって♥」

「すごい♥ご主人さまの極太デカちんぽが勇者様のヴァギナに擦り付けられてる♥ああん♥♥♥ずるい♥♥♥わたしもちんぽ欲しい♥♥♥」

「ゆうしゃさまもー♥♥♥まいかたちといっしょにごしゅじんさまのモノになるのおー♥♥♥」

勇者の取り巻きのハーレムメンバーたちも寝取られ、今や完全に俺のメス奴隷だ。

「自慢のちんぽも、取り巻きの女たちも奪われ、最後に処女まで俺に奪われる気分はどうだ？ ヤリチンのクソ勇者」

「く！くそお！ 殺してやる！ これまでの恩を踏みにじりやがって！」

すっかり丸みを帯びた女の身体で爆乳を揺らし、絶世の美少女が俺を睨みつける。

「何がこれまでの恩だ！ お前のしてきた事を思い出させてやるよ！ 覚悟しろクソ勇者！」

俺はついに、ちんぽを勇者アスカの女の入り口に突きつける。



「いや！ま、まってくれ！ボクは男だったんだぞ！勇者だったんだぞ！やだ！やだ！やだあああ！男に、ハヤテ！お前に犯されるのだけは！いやだあああああああ！！あ！あああ♥♥♥あああああああああああああああ！！！」

～～数年前～～

魔王を倒す勇者の仲間になれ。

そう宣託を受けた俺、ハヤテ＝プランダーは舞い上がった。

この何もない寂れた村で、ただの冒険者で終わるはずだった人生に光が指したのだ。

宣託を受けてからの俺は、どんどんレベルをあげて適性のあった盗賊のスキルを取りまくった。

元から優秀だった素早さを生かした戦法や斥候として勇者さまの役に立とうと頑張ってきたのだ。

いよいよ勇者さまが村にやってきたその日、俺は一目惚れという体験をしたのだった。

「はじめまして、ボクが勇者アスカだよ。よろしくね！ハヤテくん♥」

目の前にいる絶世の美少女こそが世界を救う勇者なんて！

そのうえ田舎者の俺なんかに気軽に右手を差し出し握手をしてくれる勇者アスカさま！

黒髪ショートで、桃色の瞳もぱっちりニコニコと気さくに笑顔で俺に話しかけてくれている。

細くて白い腕にむっちりした太もも、いかつい鎧を身にまとって入るが低身長とあいまって逆にそれが可愛らしく思えてしまう！



ただ俺好みの巨乳ではなかった。鎧のせいではっきりは見えないけど明らかにツルペタであろう……無念。だが！

「へーキミが偵察役なんだ……ま、がんばってよね♥わたしはエリナ！天才魔法使いよ！」



俺を見下ろす黒いローブ姿で金髪ツインテールの美少女がエリナ。ふわふわと魔法で宙に浮いているのだが、重力に逆らえない巨乳がぽよんぽよんと眼の前で揺れている。

「わたくしはエリナの姉で僧侶のマイカと申します。もし……怪我をなさったらあなたを癒やしてさしあげますね♥」

礼儀正しくぺこりと頭を下げる白いローブの金髪ロングの美女がエリナ。頭を上げたときでもポヨヨン♥と、ひときわ大きな巨乳が揺れるのだった。

「ふーん♥あんたが新しく仲間になるハヤテかい？アタシは戦士のアリサだよろしくな！」

ビキニアーマーをまとった美人の女戦士、赤い髪のアリサ。身体は筋肉質だが、女を主張している巨乳がビキニアーマーを押し上げてツンと上を向いている。

そう！勇者のアスカさま以外はみんな巨乳の持ち主なのだ！

「勇者さまのパーティーに入れて光栄です！俺は盗賊のハヤテです！偵察でも荷物持ちでも何でもするんで！よろしくお願いします！」

「改めてよろしくね♥ボクたちは魔王を倒す大事な使命があるから、ハヤテくんは無理をさせちゃうかもだけど……頑張ってね♥期待してるよ！」

好印象だ！和やかに談笑しあう勇者さまと巨乳パーティーメンバーたち。

ここはさらに、勇者さまを褒めてヨイショせねば！

「いやーまさか伝説の勇者さまが、こんな可愛い美少女だったなんて！俺一生ついていきますよアスカさま！」

「「あ……」」

その時、巨乳のパーティーメンバー全員が絶句した。凍りつくその場の空気。

え？俺なんか変なこと言った？

「……ハヤテくん♥パーティーメンバーになったお祝いにキミにプレゼントがあるんだ♥」

しかし、勇者さまだけは変わらずニコニコ微笑んでいた。でもさらに寒気がするのなぜだろう？

「勇者であるボクのプレゼントもちろん装備してくれるよね？」

「え？はい……も、もちろんです！」

ガチャンツ！！！！

俺の首に重い首輪がはめられていた。

～～夜の宿屋～～

「誰が女だって？」

「うそだ……」

夜の宿屋、目の前には全裸のアスカさまがいた。薄暗い明かりに照らされた黒色の髪、怪しく光る瞳、少し童顔の美貌は昼間と変わらないどころかむしろ夜の色気でさらに増していた。

だが……ベッドに腰掛ける下半身には巨大なちんぽがついていたのだ。



「お、おとこ？」

「そうだよ……ボクは正真正銘のおとこのこさ。これからそれを証明してあげるよ♥キミはそこで『絶対に動かず見ているんだ』いいね？」

「ぐっ！？」

首の首輪が重くなる感覚がした。

下半身だけ露出させられ、宿屋の床に正座させられた俺はベッドの上の光景を呆然と眺めるしかなかった……

「もう♥はやくう勇者様あ♥エリナ待ちきれないよお♥」

ヒューンと飛んで勇者の首にしがみついたのは魔法使いのエリナだった。形の良い巨乳を勇者の肩にもにゅ♥とのせ、そのまま勇者と熱いキスをはじめめる。

「わたくしも♥もう我慢できませんわ♥ああん♥勇者様のちんぽいつみてもステキ♥」

「アタシもだ♥勇者のデカちんぽしゃぶらせてくれよ♥」

勃起した勇者のちんぽに群がるのはマイカとアリサ。長いやらしい舌を伸ばし、勇者のちんぽを丁寧に舐め回している。

「ぷはっ♥もう！みんながつつき過ぎだよ♥困ったもんだよねえハヤテくん♥」

挑発するように俺を見下してくるアスカさま……

「そういえば、ハヤテくんってばみんなのおっぱいばかり見てたけどひょっとして童貞？」

ニヤニヤしながら美少女たちに囲まれ、ちんぽをおっ立てる勇者が煽ると……

「そうそう、コイツわたしたちのおっぱいばかり見ててさ、気持ち悪かったー！」

「ほんと、寒気がしていましたわ！勇者様以外の男にわたくしのおっぱいを視姦されるなんて！」

「クソ野郎だな！アタシたちのおっぱいはアスカだけのものなのによお！」

彼に続いて仲間みんなが俺を罵倒し始める。な、なんなんだよこれ！

「そうだ、みんないつものやってよ♥ハヤテくんってば巨乳が大好きみたいだからさ♥」

「「「はーい♥」」」

俺を罵倒していたときとは声色を変えて、女達は勇者のちんぽに自らのおっぱいを押し当てている。

長い巨チンが白いおっぱいたちに埋もれていく。これは……トリプルパイズリ！？

桃色の乳首たちがうごめき、三つの巨乳でも収まりきれないちんぽがぶるんと反発している。

「ああ♥気持ちイ——♥もっと！もっとしごいてよ！おっぱいでボクのおちんぽしごきまくって♥」

のけぞりながら、腰を上げちんぽをつきあげる勇者。女達は暴れまくるちんぽを逃すまいと右から左から、上からと自分の巨乳を押し付け、しごいている。

「ああ♥勇者様のちんぽおかたーい♥エリナのおっぱいでいっぱい気持ちよくなってね♥」

「ああ、ちんぽが熱くて火傷しちゃいそうだ♥はあはあ♥アタシの乳首も熱くなっちゃってるよ♥」

「すごいですわあ♥さすが勇者様のおちんぽです♥ああん♥またビクンって大きくなってますわあ♥」



勇者の女達が口々に彼のちんぽを褒め称える。

「それに比べて……なんて貧相なちんぽ……わたしたちのパイズリ勝手に見ないでよ！」

「ああ、勃起だけはいっちょ前にしやがって気持ち悪い……勃起してもそれくらいしかないのが笑えるがな！」

「仕方ありませんわあド・ウ・テ・イのちんぽなんですものお……シコることしか頭はないのでしょうか？」

クソ！なんで俺がこんな目に！これほど罵倒されても正座したまま、俺は動かなかった。

いや動けないのだ。首にはめられている『隷属の首輪』のせいで……俺は勇者の命令しかきけない奴隷になっているのだ。

うう……ちんぽが苦しい。こんな巨乳好きにはたまらない光景が目の前にあるのに、しごくことすらできないのかよ！

「あはははは♥はやてくん必死すぎ♥歯を食いしばってガン見してるじゃん♥童貞ちんぽには刺激が強すぎたかな？ふふん♥」

可愛い顔しながら、こいつが一番最悪だ。最悪のヤリチン勇者だ！

「それじゃあ♥そろそろ一発目出しちゃおうかなー♥」

その言葉に仲間たちが色めき立つ。

「ちょうだい♥勇者様の子種をわたしの口に♥」

「いやアタシのおっぱいにぶっかけてくれよ♥」

「だめええ♥わたくしの乳マンコに中出ししてくれるんでしょ？」

もにゅもにゅとトリプルおっぱいが勇者のデカチンをしごきまくる。エリナの乳が亀頭に食らいつき、アリサの乳首が金玉をなぶる。そしてマイカのまばゆい巨乳が竿をつつみこみ、ポンプのように尿道から精子を押し上げる。

「うあ♥来る！精子のぼってくる！くるくるくうう♥きたあああああああ
あツツ♥♥♥♥♥♥♥♥」

どびゅううううううううううううううううううっ♥♥♥♥♥♥♥♥

「きゃああああ♥熱すぎるわあ♥すてき♥」

「すごい♥すごい臭いだ♥まさにオスの香りだぜ♥」

「ああん♥すごい量♥全身べとべとになってしまいますわあ♥」

勇者の精液を全身であびた美少女たちが自らの胸に精子を塗りたくる。テカテカとオイルにまみれたようにおっぱいが輝いている。

「はあはあはあ♥やっぱりみんなのおっぱいすごいや♥でもまだ足りないよね？おらっ！」

言うが早いか、マイカの腰を両手でつかんだ勇者がいまだ萎えないちんぽをぶち込んだ。

「ひあああああああああっ♥♥♥♥いきなり激しすぎですうう♥♥♥♥♥」

俺のちんぽの前にマイカの顔が倒れ込んできた。

「うお！エロい……」

パンパンパンパンツ

すさまじい勢いのピストンでマイカの胸にも負けない巨大なお尻が揺れまくる。

「おう♥おおう♥おうふ♥」



舌を突き出しアへ顔のまま勇者のデカチンセックスをまともに食らうマイカ。

もうちょっと、もうちょっとで舌がおれのちんぽにさわるのに！

「ふふん♥」

ヤリチン勇者が感づいているけど構うもんか

「みんなもハヤテくんのちんぽの前に顔近づけた状態で並んでよ♥今からボクのちんぽで気持ちよくなったみんなの顔しっかり見てもらおう♥」

「ええーこいつに見られるの？」

「さすがにそれは……」

「そう？いやなら二人とはここまでだね……」

あっさりと離別まで切り出すヤリチン勇者。

「ご、ごめんなさい！すぐやります！」

「悪かった！ほら！こうすればいいんだろ？たのむよ！勇者様のデカちんぽ入れてくれよ！」

慌てふためくエリナとアリサは、マイカを挟んで俺のちんぽに顔を寄せる。

うおおおお！巨乳の美女が三人も目の前に！だが、動けない！自分の意志では全く動けないのだ。おのれええ！『隷属の首輪』め！勇者アスカめえ！！

「それじゃあハヤテくんの歓迎会だ♥ボクの仲間の痴態を存分に楽しんでくれよ！」

勇者はそう言うと再び腰をふりはじめる。

「おふ♥おふう♥勇者様すごお——いいッ♥♥♥♥♥♥」

途端にアヘリだすマイカ。

「うう……勇者様わたしも……」

「アタシもがまんできないよお♥」

勇者のちんぽが突き刺さっているマイカのとなりで、犬がしっぽをふるように尻をふる二人。

「こらえ性がないなあ。しょうがないキミたちは手マンでいいよね？」

返答を聞くまでもなく、「えいっ♥」とマンコに手を突っ込む勇者。

「そ、そんなあ♥あふ♥ああああん♥あん♥」

「ひどい♥ああん♥でも、でも勇者の指もイイ——♥」

結局イケメンならなんでもいいのだろう。女達は俺の目の前でよがり始める。

デカちんぽをパンパンッ無遠慮に腰に打ち付け、両手も手首までずっぽり入れてナカをかき回している。

「「ああああ♥♥♥♥いいいい〜〜〜っ♥♥♥♥♥♥」」

クソ！気持ちよさそうなアヘ顔決めやがって！俺も！俺も！

必死に腰を突き出そうとしても、立つことすらできない。ちんぽだけが痛いほど勃起して女たちの目の前でヒクヒク揺れているだけだ。

「ほら、みんな。ハヤテくんが必死になってるよ♥かわいそうだからサービスで、エアフェラしてあげなよ♥」

腹立たしいニヤけ顔の勇者の命令で巨乳の美少女たちがアへ顔のまま舌を突き出す。

「しょうがないわね♥んべえ♥レロレロレロお♥レロレロレロレロお♥♥」

「もうちょっとで届きますよお♥ほおら♥ちゅうっぱ♥ちゅう〜っぱ♥」

「おほおおお♥おっ♥おっ♥おほおお♥んぼお♥おほほおおお♥」

女たちはそれぞれフェラをするふりをする。もちろん俺のちんぽは虚しく宙で揺れているだけだ。

「あはははは♥サイコー！よかったねえハヤテくん♥それじゃあ、そろそろ射精しちゃおうかな♥さあて今日は誰がいいかなあ♥♥♥♥♥♥」

ヤリチン野郎の言葉に痴女たちが色めき立つ。

「アタシだよお♥♥♥♥♥♥アタシの身体にぶちまけてくれよお♥♥♥熱いのをガツンとお！おほ♥おほおおおおお♥♥♥♥♥♥イク！イっちゃうツ♥♥♥♥♥♥おほおおおおおおっ♥♥♥♥♥♥」

「ちょうだい！このままわたくしに！あなたの熱い精液を！あ♥ああ♥ああああん♥♥♥♥♥♥イク！わたくしもイキますわあっ♥♥♥♥♥♥ひゃああああん♥♥♥♥♥♥」

「いやあ♥わたしに！おねえちゃんよりわたしにちょうだい！お願い♥♥♥♥♥♥精子いっぱいぶっかけてえええええ♥♥♥イク！イクイクイク！イック———っ♥♥♥♥♥♥」



俺のちんぽを前にして射精をおねだりする三人の巨乳美少女たち。

俺は！俺も！くそくそくそ！くそ！クソおおおお！！！！！！

絶頂した女たちのだ液が飛び交い、ちんぽの先端に触れる。

ピチヨン♥

「イク！いく！くそお！こんなんであえ！イク！！！！！！」

どびゅううううっ♥♥♥♥♥♥♥♥びゆるるるるるっ♥♥♥♥♥♥♥♥

「「きゃああああああああああああ！！！！」」

「汚い！汚い！汚い！ふざけんじゃないわよお！！！！」

「うええええ！気持ち悪い！なにぶっかけてんだよ！ざこが！」

情けない射精を晒し、罵声を浴びせられる。

真正面にいたせいで、俺の精液が顔面に直撃したマイカは「ふご！ふごおお！」言いながら俺の金玉を蹴りつけてきやがった！

他の女たちも俺を困んでガンガン蹴りまくってくる。俺はそれを正座のまま受け続けるしか無い。

「ごめんなさい！やめて！やめてください！いたい！ゆるしてください！」

「あはははは！サイコー！！！！もう、みんな許してあげなよお♥♥♥ボクがコイツに仕返しにぶっかけてあげるからさ♥」

「は？」

Hentai 勇者が巨根を俺の目の前に向ける。

「あはははは♥いいわねそれ！手伝うわ勇者様♥」

「へへへ♥よかったなあ！今日はお前がぶっかけてもらえるんだってよ！」

「ふん！同じ目に合わせないと気が済みませんわ！！！」

女たちがアスカのちんぽを舌で舐め回す。三人のベロがいやらしくちんぽにまとわりつくのを凝視しながら、俺は恐怖で引きつっていた。

「やめろ！やめてくれええ！ヘンタイ！ヘンタイ野郎が！」

「立場がまだわかってないようだね……これからたっぷり、しつけなくっちゃ♥」

ゾツとする冷たい顔でアスカは俺を見下ろしている。その顔が次第に緩み始める。顔が赤く口が半開きになり、ちんぽからはダラダラと先走り汁が溢れ出していた。

「あ♥イク！でる！ハヤテくんの顔面にぶちまけてあげる！口を開けて！目を見開いて！ボクのイクとこ全部見て♥♥♥あ！イクイクイクイク♥♥♥♥♥おらっ♥くらええええッ♥♥♥♥♥」

どびゅうううう♥♥♥♥♥ふばあああああああッ♥♥♥♥♥

「ふぐうううおおおおおお！！！」

火傷しそうな熱さ、大量のザーメンが目の前をおおう。むせ返る臭いに、口の中までアスカの精液で汚されてしまった。

「おえええええええ！！！！！」

「最高の歓迎会だったろ？これからもよろしくね♥ハヤテくん♥」

ヘンタイ勇者とその仲間たちのあざけりがいつまでも響いていた……

それから、俺は文字通り奴隷のような扱いを受け続けた。

『隷属の首輪』の呪いで能力が半分以下の状態で危険なダンジョンへの偵察に行かされる。

命からがら戻ってきた夜は勇者と三人のセックスを正座で見せられ続けた。

しかもこの首輪、経験値のほとんどを主人であるヤリチン勇者に捧げなければならず俺のレベルがまったく上がらなくなっていた。

魔王のいる魔大陸に近づくほど強力な魔物が増えてくる。

今でもギリギリなのに……このままでは本当に勇者たちに殺されてしまうだろう……

天使のような顔をしていながら、勇者アスカとその仲間たちは行く先々の町や村で横暴なふるまいをしていた。

魔王を倒せるのが自分たちだけであることを理由に、金品を強奪し、娘たちを犯したり……

こいつらのほうが魔族よりひどいのではないか。

しかし、『隷属の首輪』がある限り俺にはどうにもできない。
そんな絶望の中で……ついに……

パッパラパーラー！！！！

俺のレベルがようやく1あがった。勇者たちは軽く10レベルはあがっているのに……

それにいくらレベルが上ったところで、この首輪があるかぎり俺に自由なんて……

一スキル『略奪』を覚えました。一

聞いたこともないスキルだった。

しかしこのスキルこそが、ヤリチン勇者への反逆の始まりだったのだ。

2、ビキニアーマーの女戦士を壁尻でハメ倒せ！

「スキル『略奪』？」

俺は勇者たちに隠れてステータスを確認する。盗賊のスキルでも聞いたことのないものだった。俺だけに備わったユニークスキルの可能性もある。

スキル『略奪』

対象の頭に手をかざして使用。対象の能力、装備、所持品などから一つだけ奪い自分の所有物にする。

すごいスキルだ。これがまともに使えればあのクソ勇者にも勝てるかもしれない。

だが……この首輪が問題だ。

『隷属の首輪』がある限り、主人である勇者アスカを害する行動が取れないのだ。

どうにかしてこの首輪さえ取れば……ん？まてよ！もしかして……

「『略奪』」

俺は自分の頭に手を当てて、『隷属の首輪』を奪うように念じた。

そして、装備していた『隷属の首輪』は外れ俺の手元に収まっていた。

「は、はずれた……外れた！やった……やった！や！っ……」

叫びたくなる声を押し殺す。この事は奴らにバレてはいけない！

まずは首輪の偽物を用意しなければ……そして、ヤリチン勇者と三人の痴女どもに復讐を果たすのだ！

その機会は程なくして訪れた。

「ここが、魔剣の眠るダンジョンなの？」

「はい！アスカさま。ダンジョンのボスの部屋に魔剣が突き刺さっているのをたしかに見ました！」

剣マニアの勇者をおびき寄せるためのウソをつき、俺はトラップダンジョンに勇者たちを連れてきた。

「この部屋の隅にあるスイッチを同時に押せば、ボスの居る部屋への近道が現れるようです」

別のダンジョンの地図を見ながら、もっともらしいウソを喋る。

「ふーん、そうなんだ。それじゃあさっさと近道しようか」

『隷属の首輪』で自分には嘘がつけないと信じている勇者があっさり騙される。

「同時に押さないといけませんからね。まだ触っちゃダメですよ？」

「わかってるよーって、マイカどうしたの？」

パーティーの頭脳である僧侶のマイカだけがスイッチを押すのをためらっていた。

「いえ、ちょっと気になることが……このスイッチを押すのをハヤテに代わってもいいでしょうか？」

「別にいいけどさ、早くしてよね！」

「わかりました。罠の可能性もありますからねマイカさまには監視してもらいましょう」

俺も素直に従う。マイカはまだ不可解そうに俺を見つめている。やはりこいつが一番厄介かもしれない。

「じゃあ、改めていくよ！ せーの！ ハイ！」

号令と同時に勇者とアリサとエリナがバカ正直にスイッチを押し、別の部屋に転移した。

「勇者様！ エリナ！？ アリサまで消えた？ どうなってるのよ！」

不意に消えた三人に慌てふためくマイカ。

もちろん、俺はスイッチを押しふりをしただけだ。予定は少し狂ったが問題はない。

最初のターゲットはこいつだったからだ。

「やっと二人きりになれたねマイカ……」

「ひっ！ くるな！ くるな！ わたくしに触れたら勇者様がだまっていらないわよ！」

「あ、そう……」

俺は本来の能力で距離を詰め、あっさりマイカの頭に手を置く。回復や補助魔法を天才的に使いこなす彼女だが、肉弾戦では力を取り戻した俺の敵ではなかった。

『『略奪』』

「きゃあああああああああああああ！！！」

彼女から必要なモノを略奪し、これまでの復讐を果たす……

「あ……あああ……らめええ♥♥♥♥」

「さてと、これならマイカは放っておいても大丈夫だな。よし！次はアリサだ」

犯し終えたマイカをそのままにして、俺はアリサが転移した部屋へと向かうのだった。

～アリサの転移した部屋～

「おい！どうなってんだこれ！こんな壁をぶち壊せないなんて！」

脳筋のアリサを罫にはめるのは実に簡単だった。圧倒的な力ですべてを壊し、いかなる攻撃も弾くスキル『闘気のカ』を奪ったアリサはただのか弱い女でしかない。

「いい格好だよアリサ。しかし相変わらずの馬鹿力だったな、くそ腕が痛え……ヒール！」

俺はマイカから奪った知識で回復魔法を使う。ただ、少ない俺の魔力では一回が限度だが……

「な、なんでお前がヒール使えるんだよ！それにさっきのスピードまさか首輪が！？」

壁の穴に上半身をつっ込んだままの姿でアリサがわめいている。お尻がデカすぎて穴から抜け出せないのだ。

「ちくしょー！早く助けろよクズ！アスカに言いつけるぞ！」

自分の立場がわかっていないようだな。俺は無言でアリサに近づくとビキニアーマーを取り去り、ツンと上を向き弾力のある巨乳を両手で揉みしだく。

「はあ！？おい！ふざけるなよ！なんでお前がアタシのおっぱい揉んで！や、やめろ！」

ぶるんぶるん♥揺れまくるアリサのおっぱいを弄ぶ。

「ひい！よせ！なんで！力が入らないの！？やめて！いや！乳首ひっぱらないでえ！」

これまで散々殴られてきた憎しみを込めて、小指ほどある乳首をつまみ左右に引っ張る。

「あははは！面白いなアリサ？お前も俺の乳首そうやって痛めつけてただろうが！お返したよ！」

ビキニアーマーからはみだした大きな胸の先端が、いやらしく勃起し始める。

「おや？乳首いじられて感じているのか？相変わらず敏感だよな。身体はゴツいくせに……」



「あぎいいい！いたい！いたいいい！！乳首伸びちゃう！やめてええ！いたいよお！」

こいつが痛いなんて叫ぶの初めて聞いたな。おもしろえ！

俺は乳首をつかんだままぐるぐる腕を回す。

「ああああうううう！ だいいいい！ 助けてえええ！ アスカああああ！」

「黙れ！ 助けてもらおう相手を間違えるなよ！ このバカ女が！」

俺は乳首から手を離し、もう一度めちゃくちゃにアリサのおっぱいを揉みまくる。

「すげえ弾力！ これがアリサのおっぱいか！ くそ！ 手に吸い付いてきやがる！」

「やだあ！ ハヤテやめて！ ごめんなさい！ あやまるからあ！ ゆるしてくれよお！」

あっさり謝罪するアリサに俺は逆にムカついた。

「そんな簡単に許すわけ無いだろ！ 笑いながら何度も殴りやがって！ この暴力女が！ いいか！ 今からお前の尻を叩いてやる！ しっかり反省しろ！」

俺はアリサがハマっている壁の向こうへ移動する。

情けなく揺れるケツが壁から突き出ていた。

「ははは！ いい眺めだぜアリサ！ それじゃあいくぞ！ 歯を食いしばれよ！」

もちろん俺は『闘気のカ』を使ってはいない。使ったままフルスイングしたら、あっさりペチャンコになってしまうだろうからな。

かと言って手加減した状態では俺の気が済まない。

しっかりとこれまでの恨みを込めて、俺自身の全力でアリサの尻をぶちのめす！！！！

「やだ！やだああああ！痛いのもりなのお！こわいよ！こわいよおおお
おお！！！」

「せーの！おらああ！！！」

ばちいいいいいいん♥

「ひぎゃああああああ！！！」

2話サンプルEND

3、生意気な魔法使いと僧侶を姉妹どんぶりで犯せ！

「なんなのよ！ここは！勇者様！どこ行ったの？」

遠くからでも聞こえるヒステリックな叫び声。エリナを探す手間が省けると
いうものだ。

「おーい！エリナ！無事か！？」

「その声はハヤテね！あんたいい加減にしなさいよ！わたしを一人ぼっ
ちにして！すぐここに来なさい！早くしないと火あぶりにするわよ！」

怖い怖い。まじでやりかねないからな、さっさと出ていくことにしよう。コイ
ツを連れてな……

「大丈夫だったか？エリナ」

「何が大丈夫だったかよ！あんたのせいで……ってお姉さま！？」

俺は岩陰からマイカを盾にしたまま現れる。

「ああ……ううう……」

ぼーっとエリナを見つめるマイカの瞳には、普段の知性がなかった。

こいつの知識を奪ったことで一緒に知性と理性もなくなってしまったようだ。

「あんた……お姉さまに何したの！？言いなさい！言ったら殺してあげるから！」

めちゃくちゃだ。怒り狂ったこいつには何を行っても通じないからな。だからこそマイカという肉壁が必要だったのだ。

「お前こそ下手に動くなよ。マイカを助けたければな！」

「どういうことよ？」

「マイカはあの後モンスターに記憶を奪われたんだ！俺は治し方を知っている！だから頼む落ち着いてくれ！」

俺は必死に叫ぶ。エリナはまさに嵐のような女だ。

ヒステリックで自分の思い通りにならなければ絶大な魔力で暴れまくる。

普段ふわふわ浮いているのも有り余る魔力のおかげだ。無尽蔵の魔力を持つ天才魔法使いそれがエリナだった。

「そう……なら早く方法を教えなさいよ！ぶち殺すわよ！まっててね可哀想なお姉さま！」

エリナをコントロールできるのは勇者と姉のマイカだけだ。

これまでの旅でも、ちょっとした事で被害を受けた町や村は数しれない。

「それで、どうすればお姉さまはもとに戻るのよ？」

「お前の記憶をマイカに渡すんだ。俺の手を頭に乘せて念じてくれればいい」

「はあ！？あんたの汚い手をわたしの髪に、さらわせろっていうの！？嫌よ！」

「ならマイカはこのままだぜ？いいのかよ！」

「あう……あひい♥……えりなちゃん……」

「くっ！わかったわよ！やればいいんでしょ！ほら！早くあんたの手のせなさいよ！」

「ああ、助かるぜ。お前もやっぱり……バカだよな！くらいやがれ『略奪』！！！」

エリナの金髪に手をのせてスキルを発動する。奪うのは当然『無尽蔵の魔力』だ！

スキルが発動し、エリナの魔力が俺のモノになる。

「なっ！？なにしたのよ！」

「おおおお！すげええ！これが魔力か！」

目には見えないが、身体から力が滝のように溢れ出てくるイメージだ。

アリサの闘気とはぜんぜん違う力だ。

「ちょっと何ふざけてんのよ！早くお姉さまをもとに戻しなさいよ！」

せっかく手に入れた魔力に感動していると、うるさい横やりが入ってくる。

ムカついたので俺は真実を教えることにした。

「一生戻んねえよ」

「は？」

「だからこいつは一生このままだってんだよ」

「……死ね！ブラストランス！！！」

黒い闇の槍が俺を貫く……はずだった、エリナに魔力があれば。

「！？どうなってるの！ブラストランス！ファイアーアックス！ライトニング
ストーム！！！」

最後の魔法は広範囲を一瞬で焼き尽くす魔法だったはずだ。
こんな至近距離で打てば、自分も含めて黒焦げになるのだが、やはりこ
いつはイカれてやがる。

だが魔力のない今のコイツは、使えもしない魔法の呪文を叫ぶただの痛
いガキだ。

「なんなの！それに飛べなくなってる！レビテーションも発動してな
い！？きゃああ！痛い！」

ぎゃあぎゃあと、わめくエリナを蹴り飛ばす。

「残念だな。もうお前は魔法が一生使えないぜ。魔法の使えないお前な
んかただのうるさいガキだ！」

「そんな！そんなはず！……ハヤテ！いや！こないで！来るなって言っ
てんだよ！クズ野郎！きゃ！痛い！」

まだ立場のわかっていないエリナの肩をつかみ、腹を殴る。

「うぐうふ！？」

人生初めての腹パンに大きく瞳を見開き、あまりの痛さにフルフルと震え続けるエリナがうずくまる。

「お……おえええええええ……おえええ……」

いつも、空から俺を見下していたエリナが地面はいつくばり地面にゲロを吐いているのだ。

「いたい……いたいいたい！いた！ひゃん！」

「うるせえなあ、勇者が俺に毎日やってたことだろ？お前ら笑いながら見てたじゃないか」

現実をじっくりと教えてやることにしようと思ったのだが……数分後にはすっかり大人しくなった。

数発殴っただけで、張り合いのないやつだ。

「えへ♥えへへへ♥はやてさま♥おゆるしてください……えへへ♥」

「あう♥はやてえ♥すきい♥はやてえ♥」

エリナもマイカも岩にすわる俺の前にひざまずいている。

「それじゃあ、これまでのお詫びをしてもらおうかな？」

「え？お、お詫びって？」

明らかにうわべだけで俺に媚びているエリナは震えていた。

「おわびしゆる♥マイカ♥はやてさまにおわびのふえらしゆるの♥」

「マイカはよくわかってるね♥えらいぞ～」

すでに調教済みのマイカは俺の股間に這い寄って、ズボンをおろし始める。

「お姉さま！なにをしているんですか！？」

「はやてのちんぽなめるの♥いっぱいいきもちよくしたらほめてもらえるの♥」

トロンとした顔のマイカ。知的で美人な顔に俺のちんぽをおしつけてやる。

「あひい♥はやてさまのおちんぽお♥ふとくてえ♥くさくてえ♥だいすきなのお♥♥♥」

ほおにぐりったちんぽを押し付けても変わらずニコニコと微笑んでいるマイカ。



知性と一緒に理性も無くしたマイカは、俺のちんぽを手に取り愛おしそうにほおずりする。

「そんな……あのお姉さまが……」

3話サンプルEND

4、爆乳の女の子になった勇者と寝取られハーレムに復讐の略奪セックス

「くそお！どうなっているんだよ！どこだここは！ハヤテのやつ！ボクを一人にして！帰ったらまたお仕置きしなくちゃな！」

イラついているな、アスカのやつ。俺はダンジョンの陰に隠れて奴の位置を確認する。

さて……あまり待たせても悪いし、最後のショーを始めるか。

「アスカ様、探しましたよ」

俺は岩陰からゆっくり歩み出て、アスカの正面に立った。

「あ……ハヤテ！よかった♥じゃない！……お、おい！ボクを放っておいて今まで何していたんだよ！」

こいつ……よく見たら半ベそかいてやがる……勇者なのに。

「すみません。どうやら罠が発動したみたいですね。」

「みたいですね……じゃないよ！なんの取り柄もないお前を偵察役に使ってやっているんだぞ！こんな仕事もまともにできない奴はもういらない！このボクの勇者パーティーにふさわしくないんだよ！帰ったらクビにしてやるからな！」

「そうですね。俺もそう思っていたんです。勇者と言いながら、民衆から金品を巻き上げ、魔族との戦いを面倒だからと放置し、あげくの果てに女

がいたら誰彼構わず犯すヤリチンのアスカ様なんて勇者パーティーにふさわしくないってね」

「な……なんだと！？」

「これはみんなで決めたことです。なあみんな♥」

俺は振り向く。そこに全裸のアリサとマイカ、それにエリナが現れる。

「お、お前たちも！なんだよその格好！ま、まさか迷子のボクを放っておいてセックスでもしてたんじゃないだろうな！」

「そうですよ」

「え？」

「みんなでセックスしました。そうだよな！」

俺の問いに全裸の三人が、勇者の顔色をうかがいながらうなづく。

「はあ！？ふざけるな！なんでボクの女をお前が犯してるんだよ！」

アスカが剣を振る。衝撃だけで俺を斬るつもりなのだろう。

「シールド」

それをあっさりマイカから奪ったスキルで防ぐ。

「な、なんでお前が魔法を！？それに『隷属の首輪』はどうした！」

「もう、お前の奴隷でいるのはごめんなんだよ！ヤリチンのクソ勇者が！！！！！」

「ハヤテ貴様ああああああああ！！！！！」

わめきながら向かってくる勇者にカウンターを入れる。

「ひぐうう！？うぐああああああ！！！」

馬鹿正直に一直線に向かってくる奴の攻撃なんてかわすまでもない。

アリサの身体能力に、エリナの莫大な魔力で、マイカの補助魔法を使いまくった結果だ。

俺の能力は、今や勇者アスカの何倍も上を行く事になった。

「痛い！イタイイタイ！なんで！？なんでハヤテがこんなに強いんだよ！おかしいだろ！ぼくは勇者なんだぞ！」

「なんでだろうな？まあとりあえず、殴られながら考えてみな」

「ふざけるな！さっきのはまぐれた！覚悟しろ！この泥棒やろう！」

ドグッ！！

「口には気をつけろ……俺も慣れてなくて加減できないんだからさ」

「ひいいいいい！？ひいいい！！」

何度か殴るうちに身の程をわきまえたのかガクガク震えだし、床に倒れこむ勇者。

「さて、それじゃあこの首輪はめてあげようか？勇者さま」

「ふえ！？なんでぼくが……隷属の首輪なんて！」

「じゃあ死ぬ？」

「ごめんなさい！つけます！喜んで付けさせてもらいますう！」

へらへらと愛想笑いしながら俺に首輪をハメさせる勇者。

ガチャンツ

絶望の音がこだまし、勇者の顔が真っ青になる。

「あの……これで許していただけますか？へへへ♥ハヤテさま」

「んーそうだな。あとはゆっくりお前から『略奪』で何を奪うか決めるとするか……」

「へ？略奪？」

俺はにやりと笑って、なぜ奴隷の首輪が外れたか、勇者のハーレムを寝取れたかを説明していく。

「そ、そんな……くそ！くそ！たった一つのスキルでボクが負けるなんて！はっ！まさか今から勇者の力を奪うつもりか！この外道め！」
勝手に決めつけているようだが、もはや俺は勇者よりも強いのだ。
装備も好きにできるし、うーん。あ！そうだ！

「ちんぽをくれよ。おまえのデカちんぽ。それくらいしか今のお前に価値なんてないしさ……」

「は？はああああ！？何を言ってるんだ！？ふざけんな！ボクにちんぽしか価値がないだと！ひっ！やめろ！やめろおおお！！！」

「『略奪』」

「ア……アアア……そ、そんな！ぼくのぼくのちんぽが！ちっちゃくなつて！ううう！身体が熱い！」

「はははは！情けないな！ほらみろ！お前のちんぽは俺が有効活用してやるよ！お前の元カノたちを使ってな！」

さすが勇者のちんぽ、二の腕くらいまであるんじゃないか？

俺のちんぽの太さも加わって、さらに強力に凶悪になったちんぽに仲間の女たちも生唾を飲み込んで見ている。

「おまえのちんぽ完全に無くなって……って？アスカお前……」

「ふえ！？なに？なんなんだよこれ！ボクの身体があああ♥」

ちんぽを奪われた勇者のからだ。しかし略奪のスキルの力は、それだけでは済まなかった。

「おっぱいが！おっぱいが大きくなって！なんで！？え？オマンコ？うう♥お腹がきゅんきゅんしてるう♥♥♥」

つるぺたの胸が大きく膨らみ始めていた。完全にちんぽのなくなった勇者の身体は少し丸みを帯びて、股間にはいやらしい割れ目があらわれている。



「ぼくが！ぼくが！勇者の僕が！女の子になってるう！？」
荒い息を上げながら、黒髪ショートの愛らしい顔に俺好みの爆乳をたず
さえた美少女がそこにはいた。

「あはははははは！これは傑作だぜ！ちんぽを奪ったら生意気なガキが、絶世の爆乳美少女に生まれ変わったんだからな！」

「うそだ！ぼくが！女の子になるだなんて！セックスできない！くそ！魔王を倒したら、国中の女の子を犯そうと思っていたのに！」

「おまえ、そんな外道なこと考えてんのかよ……ふーん。気が変わったぜ……お前けっこう可愛いよな？」

「は？……はあ！？なにを……なにをいってるんだよ！！」

「お前から奪ったちんぽでこいつらを寝取ってやろうと思ったけどさ……この極悪勇者ちんぽの童貞は、お前で卒業してやるよ」

「は、はあああ！？ぼくは男だぞ！誰がお前になんか犯されてたまるか！このくそへんた……うぎいいいいいい！！！」

『隷属の首輪』が勇者の細い首をしめあげる。

「口には気をつけろよ。俺だってお前なんかで、勇者ちんぽ童貞を卒業するなんて……と思ってたんだけどよ……お前の身体エロすぎだろ？マイカより乳がデカいってどういうことだよ。それにさ……会ったときにも言ったけど……顔だけは好みだったんだよな……」

「ひっ！やめろ！考え直せ！男の子だったんだぞ！勇者だったんだぞ！」

「ああ……さっきまではな……だが今はエロいだけのメスで、ただの俺の奴隷だ……」

勇者の身体を押し倒す。

「やめろ！やめてくれ！……ひい！お願いですそれだけは！勇者のボクにちんぽ挿れないでえ！！！」

魔王から世界を救うはずだったヤリチン勇者は、奴隷の俺に自慢のデカちんぽを奪われ美少女に変わってしまった。

「ああ！勇者様♥あんなにかわいくなっちゃまって♥」

「すごい♥ご主人さまの極太デカちんぽが勇者さまのヴァギナに擦り付けられてる♥ああん♥♥♥ずるい♥♥♥わたしもちんぽ欲しい♥♥♥」

「ゆうしゃさまもー♥♥♥まいかたちといっしょにごしゅじんさまのモノになるのおー♥♥♥」

取り巻きの女たちも寝取られ、今や完全に俺のメス奴隷だ。

「自慢のちんぽも、取り巻きの女たちも奪われ、最後に処女まで俺に奪われる気分はどうだ？ヤリチンのクソ勇者」

「く！くそお！殺してやる！これまでの恩を踏みにじりやがって！」

すっかり丸みを帯びた女の身体で爆乳を揺らし、顔だけは絶世の美少女が俺を睨みつける。

「何がこれまでの恩だ！お前のしてきた事を思い出させてやるよ！覚悟しろクソ勇者！」

俺はついに、ちんぽを勇者アスカの女の入り口に突きつける。

「いや！ま、まってくれ！ボクは男だったんだぞ！勇者だったんだぞ！やだ！やだ！やだあああ！男に、ハヤテ！お前に犯されるのだけは！いやだあああああああ！！あ！ああ♥♥♥ああああああああああああああ！！！」



ぷちぷちぷち♥ぷちぷちぷち♥♥

「ひぎいいいい♥♥♥♥さけてりゅ♥♥まって♥♥♥♥ほんとにまってええええ
♥♥♥♥勇者じゃなくなっちゃう♥処女じゃなくなっちゃう♥♥♥♥」

「それじゃあ、勇者と処女にさよならしちまいな！おらああ！！！」

ぷちゅん♥♥♥ずりゅりゅりゅりゅりゅう♥♥♥♥

「ひゃああああああああん♥♥♥♥♥ちんぽきた！デカ勇者ちんぽきたあ
あああ♥♥♥♥おほ♥すご♥♥♥これがボクのちんぽおおお♥♥♥」

「もう、お前のじゃないんだぞ！一生な！ほら！オレの勇者ちんぽを味
わいな！！」

ずぶずぶ♥♥♥ずぽずぽぽぽ♥♥♥

4話サンプルEND

続きは本編となります。
よろしく願いいたします。

**この作品はフィクションです。
実在の人物・団体・事件とは一切関係がありません。**

18歳未満の方の閲覧はご遠慮ください。

**無断転載・複製・複写・Web上への掲載
(SNS・ネットオークション・フリマアプリ含む)
は禁止です。**

読者のみなさん、こんばんは～
ヘンタイ小説家のエロバトルンです。



作品を最後まで読んでいただき
ありがとうございました！

これからも、「凌辱」「復讐もの」「ざまあ」「敵女」
または、「男性受け」「おねショ●」「ふたなり」
などのジャンルを書いていきます。

よろしければ、フォローや
高評価、お気に入り登録で
応援していただけると
嬉しいです。

感想レビューで、好きな
ヒロインの名前やエロかった
シーンを教えてください！

twitterで情報更新中です。
こちらもフォローを
よろしくお願いします。



🔍 エロバトルン 検索

*ご注意CGのみAI生成を使用しています。

